

郷土博物館探訪

井 下 まさの



考古学には、およそ興味も知識もない私が、やむにやまれぬ義理（？）で、9月のある日、ワンパク息子共をつれて訪れた郷土博物館。案内してくれた博物館のGさんが、入口の鍵を開けたとたん、

特有の臭気が鼻をついた。（臭気などと書くと悪臭を連想するので香りと訂正した方がいいかもしれないが）それはふっと、幼い頃かいだ土蔵の中の長い間しめきった密室で物体と物体がお互いにかみしだす形容しがたいある香りに似ていた。しかし、そんな感傷も息子らのドタバタというスリッパの音にかきけされ、顔を上げたとたんに視野いっぱいにとびこんできた大木に驚かされた。

第一声は、「この木どうやって持ちこんだの」細かく切って入れ、中で組立てたこのこと、それにしては継ぎ目もコケ等でおおって、なかなか見事な化粧ぶりで、息子流に言えば「サースが」「カッコイイ」というわけでしばし目をうばわれた。

動物達や鳥達がそれぞれの姿で剝製にされ、愛嬌があって可愛らしい。はじめて見る青鸞も、優雅で美しく、先頃NHKのテレビで紹介された姿を連想しながら、国道の車公害や開発で、奥地へ奥地へと追いかまっている彼ら（？）にいたく同情して、思わず手をのばしてさわってみた。この青い鳥は、チルチル・ミチルの幸せの鳥ではなく、不思議な悲しみをたたえた滅びゆく少数鳥のよう

な気がした。こういう時はたいてい私は、わきあがってくる使命感にとらわれる。「浦幌の生きた財産。なんとか保護しなくちゃ。」なんて、そのわりにはすぐ忘れてしまって、言い出しちゃの無責任で終ってしまう。（反省しなくちゃ）

自然保護も多様な問題があって、ある人からこんな話しを聞いたことがある。「山の木に青鸞が巣をつくって、切ることも壊ることも出来なくて死活問題ですよ。保償はあってもスズメの涙程でね。」スズメの涙で青鸞が泣くようなことにもなりかねない。「為政者にしっかり考えてもらって」なんて責任転嫁して次の部屋に入る。

デスマスチルスの奇妙な臼歯の化石が座ぶとんの上にあぐらをかいている（ように見える）

1965年に上厚内で発見されて、1975年に公開された。1500万年～3000万年前ともいわれる途方もなく古い昔の化石である。歴史的価値は勿論のこと、有識者にとっては3000万年も前のタイムカプセルを開けたようなうれしい驚きであったにちがいない。臼歯の形が柱（8本ある）を束ねたようになっていることから、ギリシャ語のデスマス（束）とスチロス（柱）とを合わせてデスマスチルスと名づけられたという。必見の値がある興味深々の化石である。

各部屋の陳列棚の数々を飾る出土品の豊富さには驚かされる。下頃辺、平和、十勝太……とあげれば数限りなく実に50もの埋蔵文化財包蔵地があるという。土器、石器、ガラス玉、鉄とそれぞれ時代により用途により様々であるが、生活用品あり、武器あり、装身具あり、植物の種子などもあって見あきることがない。私に多少なりとも考古

目 次

郷土博物館探訪	井下まさの	2
浦幌町3頭目のデスマスチルス化石発見	木村方一・佐藤芳雄・後藤秀彦	3
北海道陸別町で発見した4つのチャシ跡	石橋次雄・後藤秀彦	8

表紙写真：明治41年1月24日付「小樽日報」。中浦幌駅通所の壁板の壁紙として貼られていたもの。

学の知識があれば、それらはもっと意義深く価値ある宝に見えるのであろうが、猫に小判で单なるめずらしい物体としてしか意識に残らないのがはなはだ残念であった。

息子らは、壁一杯に描かれた浦幌発祥当時の住居跡に、豆電球をつけたり消したりして遊んでいたが、何を感じたことやら。

1階は、2階とは趣きが異り、浦幌開拓の汗と涙の苦闘の跡が再現されている。炎がゆらめいているような炉ばたの照明に感心しながら、テレビ小説の「アンラコロの唄」や「お登勢」等にみる北海道開拓の絶望的な苦悩、その中にわずかな光明を見出して必死に生きた先人の魂の叫びのようなものが聞こえてくるようである。と感じの私も私がこよなく北海道を愛し、浦幌を愛しているからであって、郷土の歴史的遺産に誇りを持っていられるのであろう。(なんて誇大、又は過大評価かしら?)

外に出ると、青少年会館に学童保育の子等の元気な姿があり、眼下には、とりどりの屋根の連なりの中に息づく浦幌町民の活気があった。足元からはいあがってくるような爽快さに、思わずあたりを見まわすと、10月完成の東山森林公園が、すでにほとんど造成が終り、人工と自然の美が調和されたおだやかなたたずまいをみせている。野球

場、町民プールの他に、いまや子供達の人気の的となった全長82mの吊橋や、23,493m²もある中央広場、変化に富んだ楽しい林間歩道、ひょうたん池、スペリ台、エキゾチックな赤い屋根の公園の家などが木の間がくれに見える。

心が洗われるようなすがすがしい空間の広がりの頂点にある博物館は、青少年会館と共に森林公园の拠点なのであろう。自然環境としては申しぶんなさそうであるが、帰りしな、ふっとふりかえって博物館をみると、晚秋のたそがれのせいか、かすかに孤独の影がみえるような気がした。それは、あまり訪れる人もなく鍵のかかった扉の中でひっそりと昔話しあわしているであろう文化財の、淋しい心のようであった。

はじめに書いたように、私は自から興味を抱いて博物館を訪れたわけではない。それが、わずかの時間かいま見ただけで、もう一度行ってあの扉を開けてやりたいような、いとしさ、なつかしさにとらわれる。不思議なことである。それだけあの貴重な人類の遺産が私の心をとらえたからなのであろう。中央公民館の一角に博物館コーナーを設けたり、移動博物館などの考慮もあれば、もっと町民に親しまれるであろうし、文化財の輝きも増すような気がする。

(浦幌町在住主婦)

浦幌町3頭目のデスマスチルス化石発見

木村方一・佐藤芳雄・後藤秀彦***

▼北海道で発見されたデスマスチルス

北海道でこの動物の化石が最初に発見されたのはたいへん古く、大正の初期である。最初に発見されたこの化石について記録報告されたのは1914年(大正3年)で、東京帝国大学の徳永重康・岩崎重三の両氏による。その化石は、渡島半島今金町のマンガン鉱山から発見された。両氏は、この化石は北アメリカ大陸太平洋岸地域で発見され、報告されているデスマスチルスの臼歯であるが、これまでのものとは形の違った新しいタイプであるとして『Desmostylus japonicus Tokunaga et Iwasaki』(ニッポンデスマスチルス)と命名した(Tokunaga and Iwasaki, 1914)。

昭和になって、瀬棚町や東瀬棚村(現北桧山町)のマンガン鉱山で、2個目、3個目の発見が続いた。

1936年(昭和11年)10月、日高山脈を越えた道東の浦幌町でもデスマスチルスの臼歯が発見されたのである。発見された場所は、太平洋に面した浦幌町厚内と昆布刈石の中ほどで、太平洋に流れる小さな川のオコッペ沢である。この沢の上流で、上厚内駅から南に3km下った地点の河床で、転石として発見された。発見者は、木村某氏であった。この化石は、北海道帝国大学の長尾巧氏のもとに届けられた。この化石は、6本の柱を束ねたようなもので、確かにデスマスチルスの臼歯であった